

真言と解釈 (3)

金子大榮

今日は総論の第三として経典史学とします。第一講には、「大聖の真言」という言葉で表わされたものは浄土の三部経である、その三部経を説いた人が世界の教主であって、それはインドに生まれた聖者ではないのだということを申しました。

推察するには、相当の議論はあるだろうと思うんですが、その議論を伏せておきまして、そして第二講に、仏教に於ける学というのとは一体どういふものであるのかということでお話をして、そして仏教徒が仏教学として学んできたものは信受であり、行証であり、聞思であるということをお話したのであります。

ところで今経典史学という題を出しましたが、今日の研究に依りますれば、浄土の経典というのは釈迦が入滅されてから何年か後に出来たものに違ないとされる。それで『大無量寿経』という経典は、釈迦の説いたものでないという説や、『観経』にいたっては、中国で出来たのではないかという説すらある。浄土経典は仏陀、釈迦が入滅された後で出来たものである。にもかかわらずそれを仏説というのは変ではないか。それをどうして仏説として我々は読み、信じていかねばならぬのであろうかという問題があるわけでありまして。そういうふうには、この経典はいつごろ出

来たものであるかということ、經典を調べて、そしてこの經は積尊が入滅されてから何百年後であるというようなことを明らかにする学問もあり、經典史学と言われております。

經典史学というのは、だいたい西洋の研究から入ってきたもののように思いますが、そうではない。徳川時代にもうすでに日本人でそういうことを考えた人がおるのでありまして、徳川時代というのは政治の方から言えば封建時代と言っているのであって、文化が進まなかったということが言えるかもしれませんが、学問といたしましては案外進んだ考えを持つといった人があるのであります。或るいは、ああいうふうに着いた時代の方がかえってよい研究が出来るかもしれません。日本におきましては富永仲基(一七二五—一七四六)という人がおりまして、この人は黄檗版の大蔵經校合のため官にやとわれて、家を出たと伝えられますが、その間に一切經を皆読破してしまった。そして『阿含經』が一番最初に出来たのに違いない、その次に『般若經』が出来、その次に『法華經』が出来たというように言うた。この仲基の説は、加上説といって、それよりも一つ上、それよりも一つ上と、その上へその上へというふうに考えていったのである。天でも、初めは下にあった天である。その上にもう一つの天がある。その上にもう一つの天があるということ、ついに色界の天の他に無色界の天というようなものを考えるようになったのである。お経もその通りなのであって、まず阿含有時があって、阿含有時が編集したそれよりも一つ上部として、『般若經』が出来てきたのだというように説かれる。これを説いた『出定後語』とか『翁の文』というのは、なかなかいい本であります。私も何度か見ました。富永仲基の説というのは、今言うようなことでありまして、仲基のまねをして、そして書かれたような書物もあります。それはともかく、仲基の書物だけは確かに敬意をはらっていいものなのであります。そういう学問が日本にもあったのであります。それは西洋の方でも言われた。つまりバイブルですね、キリスト教のバイブルと言えば、あれはみなキリストが説いて、そして出来上がったもののように言うけれども、実際にキリストの言葉がどれだけあるかということになれば、本当はわからんそうですね。「山上の垂訓」というようなものは、

イエス・キリストが言った言葉かもしれんが、その他はまあキリストが言うたこととして、所謂加上して、雪だるまがころがって大きくなるようなもんだというようなことも言われる。この西洋のバイブルの研究をした人が、今度は仏教の経典もその通りだということを書いて、そういうことで歴史研究というのは、非常に盛んになる。時によると仏教の研究というのは、その歴史研究の他にないのでもないかと思われるほど、現代では盛んなのであります。

そういうのは、『論語』もそうである。まあ、あなたがたにはあまり親しみがないかもしれんけど、ついでに言うてきます。孔子の儒教ね、私達は少年時代に於いて学問と言えば、四書五経、儒学を教えられたんであります。その『論語』というのは、「子曰く……」で、孔子はこういうことを仰っしゃったということなんですけれども、この『論語』も本当に孔子の言うた言葉がどれだけあるかわからんということである。また殊に意外なのは老子との時代の関係であります。老子という人は孔子の先に生まれたのであると、そういうふうには習ってきたのであります。武内義雄氏の——今京大におられる武内義範さんのお父上であります——この方の研究に依りますと、老子の方が後なんだそうです。そして後に生まれた老子の言葉が『論語』に入っているということでありまして、こうなりますと、まあソクラテスあたりは間違いないかもしれませんが、昔の我々が尊んでおる聖典とか、聖書というものは、みな種はほんの僅かなものであって、ごろごろ転がって大きくなったものであるということになります。

今日、原始仏教の研究ということが盛んでありまして、本当に釈迦が説いた経というのはどうだろうかということの研究されている。この学校でも専門になさっている先生方もおられるし、その先生方の説を聞かんならんのであります。たとえばヤスパースの『仏陀と龍樹』という本などを読みますと、だいたいわからんというのが本当だと言っておりますね。それからより近いということを書いたためであります。ところが又そういう専門の研究者におきましても、又特別な考えをもっておる人もありまして、私の同郷の人であります。倉石武四郎という人がおります。この人は中国文学の研究家で、東大や京大で教鞭をとった有名な人ですが、かつてその人に『論語』の話聞いたこと

がある。倉石さんも、本当のことはわからんのは、その通り、その通りだが、しかし我々の学問として、とにかく『論語』というものを与えられとるのだから、これが孔子の説であるというふうに考えるのが正しいでしょう。歴史と言いますのは、だいたいそういうふうなものであって、孔子を見てきたようなことを言うたって、何か当てにならない。誰かが二階にあって窓から覗いて事故を見ておった。喧嘩なんかしたんでしょ。初めから終いまで見ておった。翌日新聞見て全然自分の見ておったものと違っておったというようなことでもあります。ですからこの証拠、あの証拠というても、そういうようなものよりは、むしろそういうふうに伝えられたということの方に正しさを認めるべきでないでしょうかと、こうも言われたのであります。これは大変面白い説であると思うのであります。

それから鈴木大拙先生がよく言われる話の中にこんなのがあります。わしは学習院の先生をしておった時に、祭日になるというとモーニングを着て出んらんかったのだが、モーニングをこしらえるのが面倒だから祭日になると欠席したと、病気で欠席届出したと。もしわしが死んだ後で、鈴木大拙の伝記でも書く人間があるとしたら、鈴木はあの時確かに風邪をひいておったはずだと。その証拠は学習院に届けが出ておったということになるだろうと。こんなことを言われました。これはちょっとひどいかもしませんが、だいたい經典史学には、どう見るかという問題があるわけであります。しかし私はそういうことによって經典史学そのものを無意味だとは決して思わないのであります。もっともと研究して、そしてこのお経はいつごろ出来たか、本当にインドで出来たかというようなことを精密に調べるといふことは、大変素晴らしいことだと思うのであります。しかしながらそれが仏教の学問であると言われれば、待つて下さいと言わなければならない。經典史学というものと、それから經典宗学というものとは別であります。經典宗学というのは、經典そのもの——語られた經典そのものの意味——を明らかにするのが、所謂宗学でありまして、史学というのは、いつ出来たかというふうな、その研究より他ないのであります。こんなことは私自身としては、この学校の教壇に立つのは五十年にもなるのですが、最初からそれを言っておったんです。

話は少し脱線するかもしれませんが忘れるといけないから、忘れない内にあなたがたに話しておきたいと思います。ついでこの間東山のある所で研究会がありまして、そこへ行って話をして、そして後で質疑応答でまたその問題が出ました。いろいろ考えさせられたんであります。それからまあ「問い」と「答え」というのは、「問い」もいつまでも無くならんし、「答え」もいつまでも無くならんところ思いまして、その時に質疑応答の紙を配ってね。そしてその紙に書いてもらった。十枚位あるんですね。それで次々質疑に答えておるんですが、これは大変にいいことだと思っております。というのは、どこへ行っても経験することなんですけれども、話をするでしょう。そして質問がありませんかと言うと、話をしたはずのことをまた質問するのです。今話したでありませんかと言いたいのですけれども、聞いておらんかったわけではないでしょうけれども、私が話したようなことをまた質問するんですね。これは考えてみますと言うと、大変おもしろいことであります。たとえて言えば、こういうようなものでしょうね。衛生講話をする。衛生講話をする時に胃病ならこうしなさい。肺ガンの人ならこうしなさいと大勢の人に話するでしょう。すんでしまうと、そのお医者さんのところへ、実は私は胃病で困っていると聞くんですね。五人おると五人とも、甲の人も乙の人も同じことを言うですけども、しかし甲の人に対して答えでは満足しないんだ。自分の問いは自分の問いなんであります。そこに自分のものにするということがあるのであります、その自分のものにするためには、もう自分の口からもう一返問わなきゃいけない。問うていくことは、自分のものにする働きなんであります。そして、その問いを聞くということは、話しをする方にもためになるのであります、うっかりするということと、「もうこれでわかっておるだろう」と思っておることが、又問われるということと、もう一つ考え直さなければならんということになるのであります。

それからもうひとつ。これはいつかどこかで話そうと思っておったことですが、又本年も後で試験があり、試験は大抵レポートなんですが、レポートを見ると大体失望するんです。こんなはずじゃなかったのになあと、どの先生に聞いてもそうだと言われます。しかし失望するということも、失望する方がよいのか、させる方が悪いのか。まあ従来の考え方から言えば、こちらは教える方だし、皆聞く方なんだから、あれだけ教えたのにわからんということは、聞く方が悪いんだと。だからさっそく落第点をつけてもいいんですけれども、どうもそうもいかんものがあるように私は考えたんであります。もっと問わせなければいかんかったのだ。問わないということが、自分のものにならないという理由なんでありませう。だから本年からひとつこう、問うという時間を考えてみたらどうかなあ。まあ二十回ある内の二回や三回位は、問い栞というものを決めておいて、そしてうんと困まるような問いを出してもらおう。そこで初めて大学というものが成り立つ。大学とは何であるかと問われると、学生と共同研究するところであると。こういうことで、私は長くこの教壇に落ち着いたのです。昔はなしをするようでありませけれども、私は大学の本科を出ただけで教壇に立たされたんで、そんな例はない。皆研究科とか、大学院を出なけりゃ。それを、ある意味で、無資格で教壇に立ったんです。困まったんですけれども、まあこんな柄にないことをするんじゃない。当然辞職すべきである、しばしば思ったんですけど、ふっと考えが変わったんです。大学とは学生と友達になるとこじゃないか。小学校や中学校は教えたり、受けたりする処であるけれども、大学とは殊に今度は大学院だからして共同研究するところである。共同研究するためには「問い」というものが、非常に大事なんです。だからいつか話そうと思っておったんですが、何かそういうことも念頭に置いて下さって、そしてレポートの時に失望させんようにしてほしいんであります。又もどりまして、經典史学というものがあって、そういうふうな形になっておる。ただ、そこに問題となるのは、だからして後に出来たものであるからつまらんとか、或るいは本當の仏教でないであろう、というようになりませうと、いろいろ言うてみたいことがあるのであります。

どこから話しましょう。ある国文学者——名前は忘れてしまいましたが——が古典の解釈法について書いておいた。それは、『源氏物語』とか、或るいは『徒然草』とか古典を研究するにはどうしたらよいかという、古典研究の方法についてなんです。その方法が非常におもしろいんですよ。その方法の名前の付け方がね。まづ第一は「道作り技^{わざ}」というのがあるように言うんです。今の人間が昔のものを知りたいというんだから、道をつけなければわからない。それはそうだろうね。夏目漱石の小説なんか、昔はあんな楽な小説はないと思っておったんですが、近頃出してみると言うと、私のような老人の目には漢字がたくさん使っていて読みにくい。夏目漱石の小説は、もう古典でよいか。註釈がなければ読めない。僕らは註釈がなければ読めんかもしれんなあ。とにかく、いわんやもう『源氏物語』や『平家物語』などの遠い昔のところになりますと、その時分の言葉はこういう意味であったということ、まづもって本文を理解することが出来るように道を作っていくかねばならん。この「道作り技^{わざ}」ということ、まづ言うておきます。道がつけられたら、その次に何をやるかという、第二に「ぐるり調べ」という。「ぐるり調べ」とはおもしろい名前をつけたものですね。つまり『源氏物語』を書いた時のぐるりを調べていかねばならない。その時代とか、紫式部がどんな人であったかという、この「ぐるり調べ」が必要である。こういうことを言うております。

だから浄土の三部経というものはいつ出来たか、どうして出来たかというようなことは、要するに「道作り技^{わざ}」であり、「ぐるり調べ」でないじゃないのでしょうか。そう考えられるわけです。だからして、それはそれでいいんです。後から出来てきたものは本物でなくて、初めに近いものほど本物であるというのは、これはひとつの独断です。これは独断だということは、少しわかりにくいかもしれませぬ。しかしお釈迦さまの教えというのは、初めに近いほど確かであり、離れれば離れるほど釈尊の精神に反するものであるという、そういう考え方はむしろ逆な

んでないかなあ。逆だという考え方もひとつあるわけでありませう。ある時代を隔てなければわからない、——その時代ではわからないが、ある時代を隔ててくるといふと、——相当な距離があつて初めてわかつてくるということもあるのであります。西洋の美術品と、東洋の美術品というものの違いを論じたものをしばしば読んだことがあります。西洋のことはわかりませんが、東洋の美術品について、確かにそうだろうと思われれることはね、出来た時よりは、だんだん使っている間に値打ちが出るというのが本当なんだそうです。たとえばお抹茶の茶碗というものでも、出来た時はそう何でもないんありますけれども、茶の湯をする人々に使われて、そしてこやがて時がたてばたつほど、時間がたてばたつほど値打ちが出てくる。つまりそれが本当に値打ち物であるか、或るいは値打ちが無いとかいふことは、作つた時だけで光っておるが、それが後になればなるほど駄目になるということでもわかるんだそうです。思うに、人物もそうなんでしょうね。人物も生きとる間に偉らかつたということであっても、死ぬといふとばたつと忘れられてしまふような人もあるんです。政治家なんていふのは、そういうことは淋しいでないかと思ひますね。ところが思想的に生きた人といふのはそうではない。その時には誰にも目はかけられなくても、年月がたつ間にそういうことであつたかといふふうなものが出てくるところに、そこに意味があるのであります。

お釈迦さまもそうなんであつて、原始仏教、原始仏教と言ひますけれども、そんなこと言つて四諦八聖道だけかと言つて、そうはいかない。その四諦八聖道を弟子達、或るいは信者達が実践している間に、だんだんそこから磨き出されて出て来たものが、これが大乘の經典であると、こういうふうに見えることが出来ないものでしょうか。ともあれ、初めはこうだといふ、その初めはこうだといふことだけを信用するといふことは、歴史といふものの考え方の上に於いても、そもそも「歴史とは何ぞや」といふことから考へていかねばならない。いつでも例を出す例なんですけれど、たとえば蝶を研究する。或るいは蟬を研究する。蝶を研究する場合には、まづ蝶を研究する。そしてその先は毛虫であつたんだと、こういうことの方が本筋でないですか。そうでない。毛虫を研究して、——元は毛虫だつたんだとい

うようなことを言うて、蝶を知らないで毛虫だけを研究して、そして毛虫の中から後に蝶が出るんだというふうなことをわかる人があったら、そらすばらしいものなんだけれども、そういうわけにはいかない。つまり蝶になったという事を予想しておつて、そうしてその蝶を研究するから、それが後に、というふうなことになるんであります。そういうふうな、こう発展性というものを内に持つておるといふことは、それは古いものから新しいものへと、こういうことだけでは実は歴史研究というものは成り立たないんです。歴史研究というものは、古いものから新しいものへとということと同時に、新しいものから遡つて古いものへと、両方見ていかなければならないものであります。だからして、我々は浄土の経典というものを、——『大無量寿経』というものを読む上におきまして、この経はいつ出来たか、どうして出来たかというふうな「ぐるり調べ」、そして「道作り技」も結構なんであります。そうして出来た時に、その時にそこに浄土教というものがあつたということではなくてはならない。そうならば、何はどうかあつても『大経』は『大経』でいいでないか。『大経』は『大経』として研究するものでないであらうかということが出てくる。

四

そこで先ほどの人がこう言うんです。「道作り技」と「ぐるり調べ」が出来て初めて本尊対面ということがあつた。本尊対面というのは、つまり『源氏物語』なら『源氏物語』そのものにぶつかつて、そして『源氏物語』の価値いかに考えることなんだと、こうある人に話したらば、シェイクスピアなどもそうらしいね。シェイクスピアの作品なども、さあシェイクスピアはこの劇をどこで書いたとかどうかということとは、わからんそうですね。結局シェイクスピアは、シェイクスピアの作品によつて知る他ないということになつてゐるそうであります。だから「道作り技」も結構だし、「ぐるり調べ」も結構だけれども、結局『大経』というものを見る時には、『大経』は、『大経』というものを見る時には、『大経』は『大経』として本尊対面をしなければならぬ。おそらく『源氏物語』を見る時には、もは

やそれは紫式部の作ったんだとか、そういうようなことは皆超えて、そして『源氏物語』そのものの価値というものを、——その文学的価値というものを見ていかねばならぬでしょう。それを彼は本尊対面と言ったのであります。そして本尊対面にまた段階を分けたのであります。本尊対面にはまず読まなければならぬ。これも非常に大事な事だと思えますね。朗読しなければいかんと言いますね。今のように印刷したものを見ただけで決してものがわかるものではない。必ず朗読しなければならぬ。それはそうでしょうね。しゃべることを書いたんだからね。だから書いたものを読む時には、しゃべった元へ戻さなければならぬ。だから『大無量寿経』の研究という場合には、『大無量寿経』を読んでおらなきゃならない。読まないで研究するというような事も、近頃あるらしいね。たとえばお釈迦さまが出世せられた本懐、つまり出世本懐というようなことは、『大無量寿経』に説かれてある。出世本懐論であります。それを『大無量寿経』を読まんで言っている人がありますものね。だから「出世本懐について」、という題を出せば、相当立派に答案を書けるんですけれども、それはどこに書いてあるかと言うと、おろおろしてしまうのです。変なことなであります。それじゃ本当の事わかるはずがない。だからまづ目で見るといふ事も大事であります。もう一つ大事なことは朗読しなければならぬ。言語というものを、——言葉というものがいかに人間生活の上に重要なものであるかということも、いろいろ考えていかねばならぬのですが、ともあれ朗読しなげりゃならぬ。こう言うっておるのであります。

それからそれでいいかという、朗読だけじゃいかんと言うのです。節を付けて読まなければならぬと言うのです。これはまたおもしろいことを言うたものです。必ず節を付けて、浪曲なんかには「平忠盛 まかり出たるは」とあるんだそうだ。それをただ音読すればいいと思って、「まかり出たるは平忠盛」と棒読みにしたのではいかんと言うのです。これじゃ一向わからんと言うのです。やっぱり節を付けて「まかり出たるは」と言わないというと、本当のことはわからん。それはまあそうだね。ひとつ覚えていますがね。その人はこういう例を出しています。長崎県の或

る学校へ行って、そして先生の教えられるのを見ておった。そしたら誰の歌ですかね。「いちのはつ　花咲きにけり
は　この身には　今年ばかりの　春ゆかんとす」。それを生徒に読ませた。すると「いちのはつ　花　咲きにけり
この身には　今年ばかりの　春ゆかんとす」と、つまり意味で読んだ。意味で言えば、——意味通り読んだんですけ
れども、先生はよろしいと言わない。そして最後に、五七五の調子で「いちのはつ　花咲きにけり　この身には
今年ばかりの　春ゆかんとす」と。五七五調でやった時は、五七五の意味として「いちのはつ　花　咲きにけり」な
んであります。花で切らんならんですけど、それじゃ作者の、歌った人の気持ちが見らんと言うので、「いちのはつ」な
で切って「花咲きにけりは」と言わなければだめであると。そういうことがあるようであります。

聖教を読む上におきましても、どこで息を切るか、どこで音読するかということが重要な意味をもっているとい
うことあります。まあ余計なことを言うたんでありますが、帰するところ本尊対面ということが、それが聖教の研究
でなくちゃならない。だからもうそうなれば、誰が作ったことの、いつ出来たことかというようなことによつて価値
が決まるんじゃない。価値は、ものそのものの上にあるのであります。もし『大無量寿経』というのは、後世によつ
て作られたものだからつまらんと言うのであれば、一般的に申しますれば作ったものはつまらんといいことでありま
す。作ったものはつまらんなら、人間は、自分の作った家におらん方がよい。作ったものがつまらんならば、法律
も学ばんでいいとなってくるのです。そうはいかないのです。その作ったものが善いか悪いかということに価値判
断があるのであって、作ったからつまるとかつまらんとか、おのずからのものであるからいいということはないはず
であります。そういうことで、本尊対面で経典そのものの価値いかんということが、本当の我々の仏教学の精神でな
くてはならない。こんなことを言うと、僕は決まっちゃったように思うんですけれども、しかしどうも見たら、研
究というものはそうはいかんものですね。そうなら調査報告でしょう。今日の学問は調査報告であつて、研究発表と
いうものと調査報告というものと、少し区別したらいいんでないか。「ぐるり調べ」したり、「道作り技」をしたり

するのは、つまり調査報告ですね。このお経にはこう書いてあります。要するに經典史学というのは調査報告でありまして、だからこのお経は先に出来たのか、あるいはこのお経は後に出来たのか——ということになります。調査報告したということだけでは、決して經典の正意というものはわかるはずないんでありますが、僕は何十年同じことを繰り返しおりましたも、いつでも新しく又それを問うのであります。今申しましたように、原始仏教と浄土教とはどういふ関係になるであろうかというような問いは、もう何遍でも繰り返し返されておりますが、日本の人より外国の人は、なおそう考えておるようですね。仏教を研究しようと思うておるんですけども、まだ日本の人はこの本尊対面しようというそういう気持ちがあるからいいんですけど、外国の仏教の研究者は、調査報告さえすればいいいんでから、だからなおさら原始仏教と浄土教とはどういふ関係になるのかというようなことを問題にするのであります。

五

そういうような意味におきまして、經典史学というものを見ていかねばならない。私はもう一つ經典史学というものの中に、經典文学というものがあるはずだと思います。つまり本尊対面といひますのは經典文学。その他に經典宗学というものがある。經典三学ということをや、かつて発表したり講演したこともあります、いずれも經典宗学として私は話するんですけども、しかし經典宗学にもう一つ因縁のあるのは文学だと思ひます。經典の文学というものがないために、またいろいろと野暮な議論が出てくるんであります。たとえば「是より西方十万億の仏土を過ぎて世界有り、名けて極楽と曰ふ。其の土に仏有す、阿弥陀と号す」と、こう言っております。これ文学でしょう。少くなくとも文学として読んだらもう少しわかるだろう。それを文学として読まないでね。そして何として読んでおるのかなあ。西方浄土。ジェット飛行機が出来たら行ってみるのかと、そういうような頭で聞こうとする人があるのであります。また西方浄土なんていうのは古い考えで、あれは仏教の思想ではない。あれは外来思想で、当時そういう思

想があったのが、インドへ入ってきて、そして仏教と一つになって西方を願生しようとして出てきたのである。だから淨土思想は、仏教本来の思想でない、こういうようなことを言おうとしようとする人もあるのであります。これも「ぐるり調べ」だなあ。そう言ってもいいんでないかなあ。「ぐるり調べ」としては、そうでも差し支えないんであります。ただよそから入ってきてても仏教がそれを撰取した限りは、仏教に違いないんであります。たとえ加茂川がいろんな川が入ってきて、入ってきた川であっても加茂川じゃありませんか。そういうふうにです、ただ一筋の流れがあって、その中の中へ仏教的でないものが入ってきてても、仏教がそれを撰取した限りに於ては仏教であると言わなければなりません。そういうふうに言わなければならぬということは、何か西方願生ということとはわからない。よくわからないから、わからないという——淨土の教えというのわからないから、わかるようにするために外来思想であるとか、いやこれは本来の仏教でないとか言っただけしようとする。片付けようとするところに、そこにいろいろの思想が出てきたんであると思うのであります。片付けんでもいいんじゃないかなあ。それを一つの文学として、そういう表現として、そして西方に淨土ありと言ったらば、すなわち涅槃の世界であると、端的にくるはずであります。「入り日を観ず」で、そしてそれに涅槃を感じる。ミレーの「晩鐘」という絵は有名で、鐘を聞いて、そして一日の祈りをおさめております。あれに似たようなものがありますが、とにかく夕暮れと言えば、一日の仕事を済ませて、そして静かに落ち着いていく。これが涅槃の世界。「西方に淨土あり」ということは、すなわちそれは涅槃であるか、涅槃の世界がある。

そういうふうな經典の上に文学的意味というものをよくわかれば、やがて宗学とも成り得るのであります。たとえばこういうことが一つあります。十二部經ということがあります、どのお経でもそのお経の中身を分けてみると十二部に分けることが出来る。これを十二部經と呼んでおります。それは中村元氏の『新・仏教辞典』（誠信書房刊）の二五八ページにあります。それを読んでくれた方がいいんじゃないかな。それも一つ気がついたことなんで、とても実行

出来そうにもありませんが、こういうふうな引用文などをね、もっと元気な時なら後ろみて黒板に書くんですけど、黒板に書く元気はなくなっちゃった。「どれそれを見るべし」としておくより仕方がありません。しかし引用文などは外国では、予め引用文を出さなきゃならん時は、このことごと、と指定しておいて、そして学生の代表者が図書館と連絡して、そして講義を聞く時には、その引用文のところを印刷して、そしてもう引用文をいちいち書いたりなどする必要がないようにしてあるそうであります。それはまあいいことですね。そうせなけりゃならんものでしょう。

経典とは十二部に分かれている。その十二部というのは、(1)契経、スートラ。スートラというのは、普通法なり、もっぱら教えを説いたものであります。それから、(2)応頌というのは、その経典に書いてあることをもう一遍偈文にしたもの、これは浄土の経典にはありませんけれども、『法華経』などはだいたいそうですね。ずっと散文に書いてあるのをまとめて偈文にしてあります。それから、(3)記別、記別などは、今中村さんの辞書を見てもらいたいんですけど、いろいろな書いてあります。今まで記別と言ったことは未来役でありまして、それを教えを聞いていこうというところ、お前はこれから何年何々の徒に覚りを得るであろうという未来役です。それから、(4)諷頌というのは、これは『大経』にもあります。「嘆仏偈」とか、「三誓偈」とか。これは同じ偈文でありまして、も応頌と違いました、独立した偈文であります。それから、(5)自説というのがあります。仏自ら説かれる。問いを待たずしてお説きになる。『阿弥陀経』などが無問自説と言われておりますが、『大経』は阿難との問答であり、『観経』は韋提希との問答である。ところが『阿弥陀経』はひとりしゃべりしておられる。そのひとりしゃべりしておられるその自説の部分がある。それから、(6)因縁。因縁話というものがあります。それから、(7)譬喩、おたとえがある。それから、(8)本事、本事というのは、お釈迦さまやお弟子に先の世にこういうようなことがあったんだということが本事。それから、(9)本生、本生というのは、特にお釈迦さまに限ってお釈迦さまの先の世の物語りである。それから、(10)方広、方広というのは、広大無辺のことが説いてある。それから、(11)希法というのは、その広大無辺であるだけでなくして、世に不思議なこと、まあ

『観経』でいうと、光台現国というのは一つの希法かもしれませんが。『法華経』をお説きになるとときには、眉間の光が東方の八千土を照らしたということが言うてある。それから最後に、(12) 議論と言いまして、お経の上に於いても問う手段と答える手段がある。

六

これを十二部経と言いますが、これをずっと見ますという、半分は文学だね。契経とか応頌とか自説とかいうようなものは、これは経は法なり常なりの原則に合いますけれども、譬喩だの因縁だの本事だの本生だのということ、皆文学だと言つてよいでしょう。だからそういうふうな表現をとつてお経の文学史の研究というものが、もっとこう明らかになってくれば、やがて經典の精神がどこにあるかということも、おのづからわかってくるに違いない。こう思うのであります。

要するに經典史学というのは、それが今日仏教学と言えはそれより他ないことになっておる。従つてそれを、それはつまらんとすることは決して言わない。そういうところからいろんなことがわかってくるに違いない。わかつてくるに違いないけど、わかつてきた上で、本尊対面を要求しておるのであります。だからして後に出来たものだからつまらんとか、このお経はどうかとかいう、そういうことではなくて、經典そのものの価値というものを見ていかねばならない。そもそも經典そのものの価値は先ほど申しましたように、読むものによつて現われてくるものであるということであります。まあこれはよくわからんことでありますけれども、京都や奈良あたりにあるお仏像でも、大勢の人に拜まれてきたので、だんだん尊くなつたんだという説があります。そういうものかもしれません。彫刻して、そしてあそこに据えられた時も尊かつたのかもしれませんが、拜むにしたがつて尊さを増す、こういうことがあります。お経の値打ちというようなものは、読むにしたがつて現われる。読むにしたがつて現われるので

すから、何遍でも読めば読むほど、ここにこういう意味があった、ここにこういうことがあったということでありませぬ。したがって、師匠と弟子というようなものもこうだろうな。要するに師匠の値打ちというのは、弟子によって現われるのでありまして、よき師あればよき弟子ありという言葉もありませぬけど、又同時によき弟子あればそのお蔭でよき師になるということもある。それが永遠なるものという意味でしょう。いつまでもいつまでも読まれていくという事は、そのお経そのものに値打ちがあるからに違いない。けど、いつまでもいつまでも読まれていくということによって、いよいよそのお経の値打ちが現われるというようなものが、それが殊に「大聖の真言」としていかねばならんものなのであります。

と、というようなことを言うたのですが、これはいったいどういうことになるのであるか。こうなりますと、ここには語れば語るほど語り尽せない何かがある。その語れば語るほど何かがあるというそれはいったい何であろうか。こう言いますと、今まで大聖の経説を尊ばなければならんと言いましたが、最後に経説を超えるものというものがなくてはならんと思います。つまり経説に囚われてはならない。経説を超えるものが、必ずなくてはならないのである。だからあらゆる経典は紙に書いてあったり、言葉であったりする前に、言うことも出来なければ又書くことも出来ない、所謂「無字の経典」ですが。「無字の経典」というのが、——字に書かない「無字の経典」というのがあって、その「無字の経典」を書き表わしたのが「有字の経典」である。こう言っているんである。『華嚴経』などを読みますという、非常にはっきりしておるんでありますが、『華嚴経』は六十卷（旧訳）、八十卷（新訳）という非常に大部なお経であります。華嚴宗の人に言わせるという、これはほんの一部であって、本當の『華嚴経』は、山をすっかり筆にして、海は全部墨にして、そして書いても書き尽せないものである。それが本當の『華嚴経』である。だから六十卷・八十卷というのは、その『華嚴経』のほんの一部分だけを、ちょっと出したものであると、こういうことを言おうとしております。なかなかおもしろいことです。

それはそうなんだろう。『華嚴経』に限ったことではない。『大経』あたりでもそうであっていいんであります。もともと経典というのはですね。つまり永遠のまことというものを言い表わそうとしたものであって、言い表わそうとしたものは、表わす先に何かがなくてはならない。そこに我々が最後に、経説に捉えられてはならない。経説を読むという事は、経説に捉えられてはならないということであると言ってもいいんでしょう。これは小説ですけども、孫悟空という猿の出でくる『西遊記』という書物がありますね。『西遊記』というのは、玄奘三蔵が経典をインドへ求めに行ったその紀行を材料にして書いた小説なんでありますが、あの終りの方に「無字の経典」と出てきますね。玄奘三蔵が四人の怪物弟子を従えて、そしていよいよ経典をもらおうという時に、授かった経典には何も書いてない。字が書いてない。これでは折角ここまで来てと言ったら、やっぱり中国の人には字に書いてないとわからんという事で、それではということではある経典と替えてもらうてきたという話であります。もちろん「有字の経典」がなければ「無字の経典」ということもないだろう。そして「無字の経典」は初めからあるはずがない。いや初めからあるものであるかもしれないけれども、それを字に表わして字に表わしたそのままが、又字に表わせないものがあるということである。そうでありますから、たとえ史学といえ或いは宗学といいますが、その言葉に捉えられてはならない。だからさきほどの話に戻しますというと、西方十方億に仏土があるとこう言っても、文学的に読めということは、それはどういう意味であるかという、捉えられてはならんということである。西方に行けばあるんだそうだと、そんなふうに経典を考えてはならないんであります。

七

このことにつきましては、かつて『仏教概論』を書きました時分に読んだのですが、真言宗の豊山派長谷寺に戒定（一七四九〜一八〇五）という人がありまして、この人の書物を読んだことがあります。今はどうなっておるか知りませ

んけど、長谷というのは学問が盛んでありまして、東西本願寺、古の講者達は長谷へ行って勉強したということになっておるんであります。その長谷に所謂、天明の三傑、戒定、林常、法住という三人の学僧がおりまして、なかなか盛んであったもんだそうであります。伝えるところによりますと、戒定、林常の長谷寺の教育法は何か一つのこと、たとえば出世本懐なら出世本懐という問題があると、そうすると或る人がそれについて意味を述べる。そして質問が出る。先ほど申しました質問がね。質問をあげて質問をかたっぱしから答える。答えられないのが出てくる。答えられないのが出てくると、問いを出した方がかわってやるんだそうです。近頃は、先生など当てにしないで、学生中心ということが流行るんだから、こんなふうになってみたらどうです。皆銘々でやるんだなあ。先生などは当てにしないでね。僕はこう考えるところ。後みな質問で、質問に行き詰まったらば壇から下りる。そして詰まらせた方が代って私はこう思うと。そして又質問が出る。又詰まるというと、それにも本当は弊害があるかもしれないけどもね。そういうふうにやったもんだそうです。その戒定の『華嚴五教章(帳秘録)』を読んだ時に、他にこう考えた人もあるんだなあということ、私には忘れられないものであります。

それは『仏教概論』を書きまして——まあ読んでみて下さい——当時読んだのでありますが、戒定はこういうようなことを言うんであります。仏教というものは道德教である。道德教というのは、こうあるべき道を説くものである。記録・指南の道に非ず。記録じゃない。西方に浄土があるといった記録じゃない。中国は方向を指し示すんですね。だからして浄土有りというも、地獄有りというも、そういう記録じゃない。行ってみたら鬼がおって、そして虎皮の禪をしめているという記録じゃないと言うんだ。だから道德教で、人間の道というものを何かの形で表現したものである。だからして昔自覚した人があって、そして自分がこう思うと。これが仏法でなくてはならないと。そういうことを発見するというと、それを「仏曰く」と書いたものだ。だから「仏曰く」とは、仏の心はこうだということであって、「仏曰く」とは、仏でない、——仏の心の他に「仏曰く」はないのである。

今でもまだ頑張る人があるかもしれませんが、仏教というのはお釈迦さまが説いたものであるという「大乘仏説論」という主張がある。ところが一方では大乘教というのは、お釈迦さまが説いたものでないという「大乘非仏説論」という主張もあります。村上專精氏などは大乘非仏説論をとなくて、そして一時破門されたというような、そんな時代もあったんですよ。そういうふうに言うけれども、しかし仏説ということは仏の精神ということである。そうですね、それはね。『華嚴經』を読むと、そう書いてありますよ。この經典は仏の説でないとはっきり言うてあります。仏の心である。だから仏の心を表わしたものを仏説として、こう言うてきたもんである。戒定は、もう少し思い切ったことを言うてますが、お釈迦さまのことを盲聾寂黙だと。そうするとお釈迦さまは黙っておったんだと。黙っておったというのは極端だと思えますけどね。要するにしゃべったもんじゃない。しゃべったもんじゃないが、後の人はその精神を受けついで、そして「仏曰く」として伝えたものなのだ。大乘教は確かにそうでしょう。所謂阿含等の經典というのは、釈迦の言葉かもしれませんが、大乘教は釈迦が死んでから、釈迦が死んだ後に、そこに釈迦の精神を表わそうとしたのが大乘の經典である。

「それ仏道の書たるや 記録としてこれを読まば 即ち皆怪し 妄に似たり 愚者はその記にくす 聖者をもつて 福をたばらかすとす」。仏教の書物というのは、皆記録であるとして読むというと、皆怪し、嘘っぱちのように思われる。それを愚者は注目している。愚かな者は、これをありがたんだと言うておると。智者達は、愚にもつかんことである。子供だましだと言うけれども、どちらも間違っておる。どちらも間違っておるのであって、ちゃんとしたところに着眼すれば、そうすればいかにもその經典の良さというものがわかるであろうと、こう言うております。学ぶものはそこまできなければならぬでしょう。そうすれば、つまり仏教を学ぶということは、仏教に学ぶということである。いつでも学問は自証である。自分の身に引き付けてこうだというのが自証。唯識の学問には、意識には自証分と証自証分というものがある。自証をまた証明するものがあると、こういうことであります。經典というのは、

証自証、——我々の自証を証明するのが経典である。その証自証を証明するのが自証。自証分と証自証分というのは、互いにいくんだと唯識では言うておるのであります。大変よいことであります。自証を証明するのは証自証である。証自証を証明するのは自証である。だから自分の言うことの間違いを明らかにしてくれるものがお経であり、お経の間違いないことを明らかにするのは自分の威徳であるということである。

経説に即しながら、経説を超えるところの道がある。経説を超えということと、経説に順うということは一つの道であるにちがいない。そこまでいってね。そして我々が本当の自由の気持ちで経典を読んでいこうではないか、というのが私にとっては真宗学というものであり、そして仏教を学ぶ者の喜びでなくてはならぬと思うのであります。

（本稿は昭和四十四年五月十九日の大谷大学における集中講義、「真言と解釈」の筆録である。文責 編集部）